



Title	「記号化された他者」への異議申し立てーグレゴリー・ケズナジャット氏講演会傍聴記ー
Author(s)	胡, 家正
Citation	大阪大学人文学林シンポジウム グレゴリー・ケズナジャットの芥川賞候補作を学際的に読む. 2026, p. 5-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105161
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「記号化された他者」への異議申し立て
—グレゴリー・ケズナジャット氏講演会傍聴記—
胡家正（人文学研究科日本学専攻博士後期課程一年）

二〇二五年も終わりが近づいた十一月ごろ、大阪大学会館にて作家・日本語文学研究者のグレゴリー・ケズナジャットさんを迎えた。約1時間にわたる講演では、在日外国人としての体験談、小説執筆に至った経緯、さらに創作における問題意識など、極めて示唆に富む内容が語られた。私自身は、日本に身を置く外国人であり、日本語文学の研究に携わりながら小説執筆も志す一人として、ケズナジャットさんの言葉に共感を覚え、多大な刺激を受けた。本傍聴記は、その触発と共感から紡ぎ出されるものである。

大学卒業後、ケズナジャットさんは、京都という観光客の溢れる都市に住んでいた時期があった。当時、彼の容姿は、他人の目には「観光客」として映され、またそのように扱われたという。こうした経験から生じた疎外感の中で、彼は本の世界に目を向けるようになった。「本は誰に対しても開かれている」、「日本人じゃないから本に拒まれることは絶対ない」という話は、とりわけ印象深い。また当時、中国出身の作家・楊逸が芥川賞を受賞し、日本語を母語としない作家として史上初めての受賞となったことは、文壇の大きな話題となっていた。こうした個人の体験と当時の出来事に触発され、「文学の中には、外国人の居場所がある」という思いがケズナジャットさんに芽生え、文芸創作への意欲と繋がっていた。

しかし、講演の後半で語られたように、文学作品における外国人の居場所は、むしろ「狭い」ものでもあり、その狭さ自体が彼の創作動機、ひいては問題意識の一つとなった。すなわち、現実社会に存在している外国人への疎外は、既存の日本語文学——近代作品であれ現代作品であれ——の中にも根強く残っているというのである。たとえば、白人男性が日本語文学に登場する場合、その人物像はしばしば「帝国主義」の文脈や「エリート層」と結び付けられがちである。こうした記号的な「外国人の使われ方」ばかりでは、小説の表現としていささか退屈であると、ケズナジャットさんは述べていた。彼が描き出そうとしたのは、日本社会の一部として生きる在日外国人の、よりリアルな生活である。言うまでもなく、こうした原点を持つケズナジャットさんの文学における外国人像は、主流的な表象・ステレオタイプから逸脱したものである。

文学作品に潜むこうしたステレオタイプと記号化は、ジェンダーの視座から作品を読み解く「フェミニズム文学批評」を専門としている私が、本講演において最初に共鳴を覚えた点である。例として挙げられたのは、近代日本文学における「生産」と「再生産」の間のジェンダー非対称性である。女性が家事・介護といった再生産労働に従事することは当然視され、小説において埋没しがちである一方、男性がそれを担う場合には、それ自身が作品の中心・主題に据えられうる。近代日本文学の「病妻もの」はその典型であるが、そこには往々にして「ケアする夫」の内面の葛藤が前景化され、ジェンダー化した役割分担

を揺さぶるというより、むしろ既存の偏見・規範を別のかたちで再生産してしまう。

講演の中で、こうした文学に存在する偏見や記号化への異議申し立てとして挙げられたのは、ケズナジャットさんのデビュー作・「異言」である。勤務先である英会話学校の倒産を経験した主人公は、同僚の勧めで牧師の仕事をすることになる。だが、その仕事において求められるのは、「若干稚拙な発音」を持つ外国人像である。というのも、そうしたステレオタイプな「外国人牧師」像こそが、人々に「楽しい別世界にいるような気持ち」を喚起させやすい媒介——記号——として機能しうるからである。さらに、特定の役割を強いられ、自己演技を内面化していく過程で、本来多層的なアイデンティティが捨象されていく危うさも、そこには提示されているのであろう。ケズナジャットさんは、このような「外国人牧師」の姿をリアルに描写することによって、記号として見られることの疎外そのものを検討している。

最後に、ケズナジャットさんの講演から触発された私自身の所感について述べたい。講演の主題の一つであった「アイデンティティの曖昧さ」という感覚は、私にとって、在日外国人としての立場以上に、フェミニズムを学ぶ男性としての立場において、より早く、そして強く経験されたものでもあった。

これまで幾度となく「男性であるあなたが、なぜフェミニズムを学ぶのか」という問いを向けられてきた。さらには、日本の有名なフェミニズム研究者らによる共著の後記で、「女性たちを対象としてフェミニズム入門書として本書は企画された」という趣旨の記述を目にしたことがある。つまり、男性は読者としての想定から排除されていた。当時、私は研究領域における「当事者性の欠如」に起因する疎外感に抗うため、女性を主人公とした物語の執筆を試みた。男性であっても女性が直面する困難に「共感」しうるのだと、証明しようとしたのである。

しかし、その試みは行き詰まった。ケズナジャットさんが社会や読者の期待に迎合しない在日外国人の生活をリアルに描こうとする過程で谷崎潤一郎の「独探」を参照する経験と同じように、当時の私はハン・ガンの『菜食主義者』やガブリエル・ガルシア＝マルケスの遺作『出会いはいつも八月』に出会った。両作品はそれぞれ女性作家が男性の視点を、男性作家が女性の視点を介して物語を構築している。私はそこに、自分が求めていた「性別を越境した共感」の可能性を見出したように感じていた。しかし、そこで私は一つの陥穽に気づかされることとなる。すなわち、このような「共感」を基盤とする意識自体が、男女という二元論的な対立を前提として成立しているという点である。実際、同性間であっても完全な共感は不可能であり、重要なのは「共感」というより、社会構造に存在する不正義に対する深い洞察と省察に他ならない。

ケズナジャットさんが示した「文学における外国人像の記号化」への批判もまた、こうした鋭い省察の現れと言える。そして、そのような思考と省察こそが、創作においても研究においても、最も力強い出発点となりうるのである。ケズナジャットさんの講演を聴き終えた現在、その確信はより揺るぎないものとなった。